

[月刊]  
**En-ichi** 

# 魂の教育を実践する

インタビュー

## 地域の絆生かした家族支援を進めよう

立教大学特任教授 倉澤 宰



日本の家庭を守る教育情報誌

今月の  
焦点

家族は次世代を育て文化を伝承する場です。同時に、自分の居場所でもあり、安心感を与えてくれる所です。…「家族が崩壊することはない」と私は考えます。

地域の絆と奉仕の気持ち生かした家族支援を 倉沢 幸…4

運動するということは…五感を知らず知らずのうちに働かせています。それが脳を活性化しているわけです。こうしたことを小さいうちからできる状況を作ってあげれば一番いいと思います。

「本来の人間」に戻って自然と触れ合う生活を 吉岡利忠…10

ブータン国王夫妻の来日は、改めて幸福とは何なのかを考えさせる。「国民総幸福（GNH）」という理念は…人間は物質的な富だけでは幸せにもなれず、喜びも得られない…という信念による。

仏教と国民総幸福の国ブータン…15

ヨシダの塾生たちが、彼以上の指導者を見つけようとしても無駄だと分かり、彼の「教育の意味」を深く理解すると、この滑稽な師を「人類の最も高潔な人物」として見つめ直すようになった。

英国の世界的文豪が著した「教育者 吉田松陰」 河端春雄…17

## 3 巻頭言

宇宙は人間を中心とした一大共鳴圏 京大名誉教授 渡辺久義

## 4 教育再生への課題と展望

家族は時代を超えて普遍的な機能を持っている

地域の絆と奉仕の気持ち生かした家族支援を 立教大学特任教授 倉沢 幸

## 8 教育再生への課題と展望

「本来の人間」に戻って自然と触れ合う生活を 弘前学院大学学長 吉岡利忠

## 12 情報ファイル

独身者は結婚意欲はあるが、交際相手なし  
少年の再犯防止「家族」「就職」がポイントに

## 14 ワールドアフェアーズ

仏教と国民総幸福の国ブータン

## 16 発言

英国の世界的文豪が著した「教育者 吉田松陰」 哲学者 河端春雄

## 18 病を克服した偉人たち

ルノアール ～リハビリ捨て「永遠に残る美」を描き続ける

## 20 子育ては絵本で大丈夫

「ひよどりごえ 源平絵巻物語」戦の中にも笛の音 劇団天童／天童芸術学校代表 浜島代志子

## 21 教育情報

人格教育に基づいた性教育—「愛と結婚の教育」を実践する

## 22 Book Review

## 24 歴史と伝統の探訪

洋学校で多くの逸材育てた米国人教師／熊本



京都大学名誉教授  
渡辺久義

## 巻頭言



「啐啄同時」とは、師弟の呼吸がぴたりと合つて一瞬にして教育が成り立つことで、「啐」は雛鳥が生まれるとき卵の殻を内側からつつくと、「啄」は親鳥が外側からつつくことである。この「啐啄の機」を逃さぬことが教育の要諦だとして、巧みな比喻になっている。

私はこれを教育に限らず、あらゆる認識の場面に当てはめることができると思う。これを「共鳴」とか「和動」という言葉に置き換えれば、世界形成の根本には、すべてこれが働いていると言ふことができる。例えば芸術というものも、作者と鑑賞者の共鳴(協力関係)というものがなければ存在することができない。ある楽曲がどこに存在するかといえば、それは楽譜の上とかCDとか演奏会場にあるのではない。かといって私の内部に観念的に存在するのではない。それは表現しようとする芸術家と、それに共感し協力する私の間の共鳴の場としてのみ存在する。「神」についても同じであろう。神は客観的にどこかに存在するのでも、人の内部に主観的に存在するのでもなく、神と人との共鳴の場としてののみ存在する。「求めよ、さらば与えられん」とは神の存在様式として解釈できる。科学的認識についても同じであろう。神も世界も、これに協力して求める意欲に応じて開示される。

宇宙は人間を中心とした一大共鳴圏として創

# 宇宙は人間を中心とした一大共鳴圏

られている、と考えざるを得ない。宇宙自然界は人間によって認識され理解されるのを待ち受けている。これは宇宙の基本的な物理常数が、すべて人間と人間の住環境(地球)を創り出すために微調整(ファイン・チューニング)されていることをはじめ、多くの科学的知見が人間を中心とした「デザイン」を指し示していることを考えれば、我々人間は最初から、宇宙自然界のデザインを読み解き、デザイナーの意図を悟るようにデザインされた存在としか考えることができない。

我々はこれまで、あまりにもこれとは正反対の教育を受けてきたために、こういう考え方をなかなか受け入れることができないでいる。しかし我々は、この宇宙に偶然生じた副産物でもなければ、宇宙と敵対すべく生まれてきたものでもない。太陽系一つをとっても、それは我々を生かすだけでなく、親切に我々を導く科学教師だったと解釈するのが現代科学の認識である――

「人間の努力の長い歴史を通じて、太陽系は理不尽なほどに親切 (unreasonably kind) だった。その研究の道のりの一歩ごとに、それは明察力ある教師の役を演じ、新しい洞察に導く新しい観察と計算を促すために、程よく困難だが、混乱した泥沼にはまってそれ以上の研究ができなくなるほどには難しくない、様々な問題を我々に与えてきた。」  
(アイヴァス・ピーターソン)

家族は時代を超えて普遍的な機能を持っている

# 地域の絆と奉仕の気持ち 生かした家族支援を

「家族」の何を守り、  
どこを正すべきか

時代が変わっても家族が無くなることはない。家族の基本的機能を守り、支援していくために、今何をすべきなのか。

社会学的な視点で言うところ、社会の基礎単位は「家族」です。我々は、社会との関係も「一個人」としてではなく、家族を通して築かれるのです。つまり「家族の解体」は、それこそ「社会の解体」にもつながるといえることです。

昨今の議論で、夫婦別性の容認や、民主党の打ち出した「子育ての社会化」を受けて、「家族が崩壊する」という論調が見られます。その殆どが、未来志向というよりも、伝統的家族のあり方を強調し、それが崩壊するという見解のようです。私

は違った考えを持っています。

個人主義が広がっていると言っても、家族という制度を他と代えることはできない。どの時代であっても家族という存在が無くなることはありません。ただ、家族は従来とは違う新たな形で再生されることは当然あり得ると思います。

「家族」を考える場合は、個別の家族と家族制度という、二つの側面があります。家族は次世代によって再生され、家族制度は時代とともに変遷していくものだと、私は理解しています。それは必ずしも、ネガティブに捉える必要はないと思います。

例えば女性は、長年続いていた「イエ」制度の下で厳しい環境を強

## 倉澤 宰

くらすわ・さい

立教大学大学院

21世紀社会デザイン研究科特任教授

1945年生まれ。バングラデシュ出身。ダッカ大学修士課程修了。1970年来日。慶応義塾大学大学院社会学研究科修士及び博士課程修了。愛知学泉大学教授を経て、現職。専攻は社会変動論、東南アジア地域研究。著書に『東南アジアの社会変動と教育』（共著）、『バングラデシュの家族制度と子供の社会化』、『マレーシアのブミブトラ政策とイスラーム化』他多数。





小さい時から家族愛を受けて育てられる中で、他の人を大事にする気持ちや人のために役立ちたいという心が育まれる

いられたのは事実です。個人の自由意志や選択権に弊害となるものがあれば、それを変えるというプロセスはあり得ます。

家族に関する今の議論は、現実にある家族と家族制度という二つの側面を混同してしまつて、分かっていくくなつていのではないのでしょうか。

家族は時代を超えて、普遍的な「核」になる機能を持っています。その部分とは何か、「家族」のどの

ようなところを守るべきか、どの面を正すべきか、検証し整理する必要があります。があるでしょう。

家族の基本的な機能は、人間を育てること、文化を継承すること、そして安らぎを与えることです。家族が人間を育成し、社会に適応させ、保護する。それによって、人間は様々な場で活

躍する。この機能は変わらないと私は思っています。

## イスラエルが作った「キブツ」の教訓

一方で、大家族が減つて核家族が増えた。その結果、家族が従来背負っていた機能の全てを背負うことができなくなった現状もあります。例えば子育てに関しては、家族内でやっていたことが、今やできなくなつていく状況が生じています。そうすると、その機能の外部委託が起こります。保育園はその例ではないでしょうか。

子育て以外では、老人ホームもあるいは外食産業やインスタント食品もそうです。核家族化とその延長線にあるライフスタイルがなくなつたシステムが社会でできあがつているようです。

もちろん、家族がやる事を全て外部でできるかという点、決してそうではないことも強調しておきたいと思ひます。

世界には、それを身をもって体

験した社会があります。イスラエルです。イスラエル建国の際に多くのユダヤ人が移住し、国家建設のために皆で働かなければならぬ状況でした。そのため、「キブツ」を作り、生後間もない赤ちゃんを含み子供たちを集め、共同で面倒を見るようにした事例があります。しかしそれは結果的にうまく行きませんでした。幼い内に親から離して共同で育てるといふやり方は、子供の成長に良くないと分かつたのです。

それを踏まえて考えると、子供を預ける保育園ができて、子育てに関する家族の絶対的重要性は変わらないということです。家族は、スキンシップそして安心感を生涯与え続けるわけです。

民主党が言う「子育ての社会化」というのはどのような理念によるものでしょうか。キブツと同様のものであつてはならないし、家族の核となつていく機能を代替することは不可能です。

家族は次世代を育て文化を伝承する場です。同時に、自分の居場

# 家族は次世代を育て文化を伝承する場であり、時代が変わってもその機能は変わらない

所でもあり、安心感を与えてくれる所です。これはおそらく変わらないとするなら、「家族が崩壊することはない」と私は考えます。

文化の継承という形で、家庭内に文化として宗教的価値観も存在します。小さい時から家族愛を受けて大事に育てられ、自分も他人を大事にすることを教わることや、家庭内での接し方によって人を敬う、人のために役に立ちたいという心も育まれます。親として、それを意識して教える役割があると思います。

## 在宅ケアに地域の老人パワーを生かす

次に、家族支援という観点から考えてみます。例えば介護の問題を焦点に考えると、家庭で高齢の親の世話をしている人たちの重荷を軽減する支援が必要です。

今の日本では、現実的に老後の生活に関する選択はほぼ一つしかありません。老人ホームやケアハウスに入居することです。在宅

高齢者の世話をする支援は不十分です。経済的な視点だけで物事を考えると、財政的には無理が生じます。従って、社会で新しい息吹、それこそ革新的な考え方が必要だと思います。

北欧諸国では、家族をもう一度見つめ直し、大切にしようという動きが起きています。その背景には、高齢者の在宅ケアの課題があります。高齢者を住み慣れた場所、今まで住んでいた家から動かせば、精神的な打撃は大きく、ほけてしまうことが多いということが見られ、それを解消するためには家族への支援が重要となったのです。

日本でも、高齢の親は元の家に住み続けたいと願う。生まれた土地や家に人生最後までいたいという高齢者の希望を支える制度やシステムが構築されているでしょうか。単にヘルパーを送るだけの問題ではありません。もちろんそれは必要です。それに加えて、広域な社会の人々が参加する仕組みが必要です。例えば高齢者が集団で

ボランティアとして高齢者の世話をすることを、超高齢化する社会として、考える余地があると思います。外国ではそのような事例があります。

生きがいを求める老人、意欲のある高齢者達を動員して、孤立しがちな高齢者家庭を定期的に訪問し、話し相手になるなどの活動は可能です。老人パワーを使って、互いに支え合う雰囲気作りと奉仕活動が可能です。

## 「奉仕の気持ち」をサポートする仕組み

地域の絆を、意識的に作り上げていかなければならないと思うのです。行政に頼るよりもどちらかと言うと、非営利団体のような組織を通して、経済原理とは違った、人間が本来持っている奉仕の気持ちを生かすことが重要です。

人間が持っている素質は、家族はもちろん、他人でも困っている人を助けたい、役に立ちたいというものです。それをサポートする

# 「家族に目を向ける」取り組みが、地域の基盤を作り上げていく

ような仕組みがあれば、おそらく相当の部分で家族を支えることができると思います。

ボランティアズムの視点で考えると、東日本大震災による大都會での帰宅困難者が注目され、何を準備すべきかと模索が始まっています。東京都が帰宅困難者を助ける仕組みを作ろうとしています。行政主導だけでなく、一般市民も関心を持つべきではないでしょうか。行政主導型よりも、市民意識を高めるような、地域ごとの検討会を進めるなど、自発性をサポートしていくようなことをすべきだと思います。

日本人の健全な助け合いの精神は、東日本の大震災で誰もが再確認しました。世界でも賞賛されています。しかし、被災地のためには何かしようという行動がある半面、被災地の瓦礫を受け入れるという自治体は少ない。あるいは被災地の木材を大文字の送り火で燃やすことができない、被災地で作られた花火をあげないといったことがあります。

放射能の懸念から生じた行動だとは言え、一度受け入れてから拒否することは、被災地の人々の心を踏みにじるようなものです。少数の人々による過剰な反応と、少数の抗議を自治体がそのまま受け入れたことを見ると、日本人の本心はどうなっているのかと気になります。このことを踏まえて行動すれば、日本は世界で最も良い社会になるのではないかと思います。

## 「社会の中核は家族」再認識を

ともかく、社会の中核は家族であることを社会全体が再認識する必要があります。この中核とは、社会の「土台」をなすので、土台が揺るがないサポートが必要です。例えば、今日の高齢化社会では、高齢者世帯や高齢者を抱える家族を支えるような地域的なサポートが必要です。

日本では町内会や自治会という他国では見られないような組織があります。これを地域的リソース

として利用することを目指すべきです。地域社会が崩壊しているとされるなか、地域のつながりを取り戻す取り組みは、「家族に目を向ける」ものにならないければなりません。それがまた地域の基盤を作り上げていくわけです。

日本では、家族は「空気」のごとく存在すると思われているかも知れません。欧米諸国では、それを意識して保とうとしています。離婚や同棲が増加して、意識的な行動によって家族の絆を確認することが見られます。

あたり前と思われていた日常生活が大震災で失われ、初めて家族の重要さを感じられるように、大震災をきっかけにして家族の絆を見つめ直す気運が高まっているようです。空気のごとく存在していた家族を行動でも確認する必要があると感じた人が多いのではないのでしょうか。

全ての国民が改めて家族の基本的な機能を確認する、そして行政と地域はそうした家族をサポートすることが大切だと思います。

子どもたちが自由に体を動かせる環境が大切

# 「本来の人間」に戻って 自然と触れ合う生活を

子どもたちの健康が危惧される。大切なのは、自由に体を動かせる環境をつくること。そして、共に遊び自然と付き合う中で、命の喜びを実感することができる。

## 子どもたちの 将来を危惧

私の専門は基礎医学です。特に人体の筋肉の研究をしてきました。例えば、子どもの頃のトレーニングで筋肉がどのように変化しているか、筋肉がどのようにして収縮するかなど基礎的な研究を進めてきました。人体の中で筋肉は六割程度の重さを占めていますが、使わなければ退化していきます。逆に、使えば使うほど機能はアップしますし、大きくなっていきます。

さて、最近(二〇一一年八月)、日本学術会議の委員会で『子どもを元気にする運動、スポーツの適正実施のための基本指針』(日本学術会議健康・生活科学委員会健康・生活科学分科会)という指針をまとめ、内閣府に提言しました。私も幹事(学術会議連携会員)として参加しました。

この中では、「子どもの正常な発育発達を促進するよう、最低限度の運動量を確保する」「多様な動きをつくる遊び・運動・スポーツを積極的に行わせる」「運動・食事・睡眠を総合的にとらえたライフス

スタイルを確立させる」ことなどを提言しています。

今の子どもたちは、以前と比べて体力など落ちていきます。子どもたちの将来はどうなるのか。そのことを危惧して今回の指針をまとめました。やはり、運動、スポーツを適正に実施していけるようにしなければなりません。

子どもの数が少なくなってきた、多くの親は子どもに手をかけ、怪我をさせないようにするでしょう。それ自体は悪いことではありません。

ただ、手をかけ過ぎであるとも

感じます。子どもを外で遊ばせることも少ないですし、塾や習い事もある。体を動かす事は本当に少なくなりました。

## 筋肉や骨の成長が衰退

子どもたちの体格は良くなってきています。ただ身長、体重だけではなく、気をつけなといけな

## 吉岡利忠

よしおか・としただ  
弘前学院大学学長

1943年青森県生まれ。東京慈恵会医科大学卒。東海大学助教授、米ペンシルバニア大学助教授、聖マリ安娜医科大学教授、青森県立保健大学副学長を経て、現職。日本体力医学会理事長も務める。医学博士。専門は運動生理学、筋肉生理学、宇宙医学。著書に『筋力をデザインする』『図解生理学』他多数。





いのは「除脂肪体重」（脂肪の量を除いた体重）です。これはイコール筋肉の量、骨の量、内臓の量を示すもので、体重が増えても除脂肪体重があまり増えていないということは、筋肉や骨、臓器の成長が衰退していると考えられるわけです。

実際、小太りの子どもが非常に多いですね。やはり体を動かさないことで肥満になるし、肥満になれば動きたくなくなります。子どもの生活習慣病も目立っています。

もちろん、スポーツをしている子ども大勢います。分布をとってみると、運動をする子としない子で、二つのピークができています。それが現在の特徴です。運動をしない子、肥満体型の子どもたちの将来が非常に気になる場所です。

また一時期、ゆとり教育で学校の授業時間が減り、体育の時間も減っていました。平成元年は六百三十時間ほどでしたが、平成十年には五百四十時間まで減りました。学習指導要領の改訂で、ようやく改善されてきたところです。大学



子どもが自由に体を動かせる環境があることが大切

でも、体育の授業を選択から必修にする動きがあります。

ただ、強調しておきたいのは、計画的に運動することも必要ですが、自由に体を動かせる環境があることが大切だということです。その意味では昔に帰って欲しいと思います。昔の子どもは一日一万三千から一万四千歩、自分の足で歩い

ていました。今はそこまで歩きません。一万歩以上歩く、あるいは動くことで、自然と体力のアップ、心臓循環器系や呼吸機能の向上につながります。

また、小学校低学年は一つの種類の運動だけをやらせるのではなく、いろいろなことをさせる。野球、サッカー、陸上、鉄棒、かけつ

こ、その他、いろいろなものやっ  
て体を動かす。そして脳の神経を  
活性化させるのです。中学年にな  
ると、そこから自分の好きなスポー  
ツを見つけてます。そして、高学年、  
中学、高校と徐々に筋力トレーニ  
ングを行います。低学年の時から  
筋力トレーニングをしても、あま  
り意味はありません。筋肉はつか  
ないのです。

## 体を動かすことで 五感を働かせる

運動することで頭の神経が活性化するということは、これまでも  
言われてきました。その意味でも  
子どもの時の運動は非常に重要で  
す。昔から「ぶらぶらしながら考  
えることが大切」と言われてきま  
したし、京都には「哲学の道」が  
ありますが、歩きながら考える、体  
を動かしながら考えるというのは、  
最も頭の活性化につながります。足  
からの神経は頭につながっていま  
すからね。足を動かす、体を動か  
すというのは、神経のコーディネー

ションです。体の各部の筋肉の協調作用です。動きがぎこちないということは、頭のトレーニングができていないということなのですね。

何もしなければ、筋肉はやせ細ってしまいます。私たちも風邪を引いて三日間ぐらい寝込むと、立ち上がる時にふらふらします。なおかつ神経系の働きも落ちます。その究極が宇宙です。宇宙は重力がありませんから、筋肉が一日数パーセントずつ細くなつていきます。ですから宇宙ステーションに長期滞在する宇宙飛行士は、一日数時間、トレーニングします。そうしないと、地球に帰ってきたときに、きちんと歩けないのです。

子どもたちが運動するということは、単に体を動かしているだけではなく、五感を知らず知らずのうちに使っています。それが脳を活性化しているわけです。こうしたことを小さいうちからできる状況を作ってあげれば一番いいと思います。親は事故を恐れたりして子どもに冒険させるのを躊躇し

ますが、「あれはだめ、これもだめ」ではなく、「これはいい」、「こういうことをしなさい」ということから始めさせたいと思います。自然が失われたとは言っても、そのようなことができる環境がなくなつたわけではありません。いろいろな運動をさせて、神経を活性化することが本当に大切です。

また、保護者には食育に関しても理解していただきたいと思えます。一例ですが、朝食を食べていないと学力が落ちるというデータが

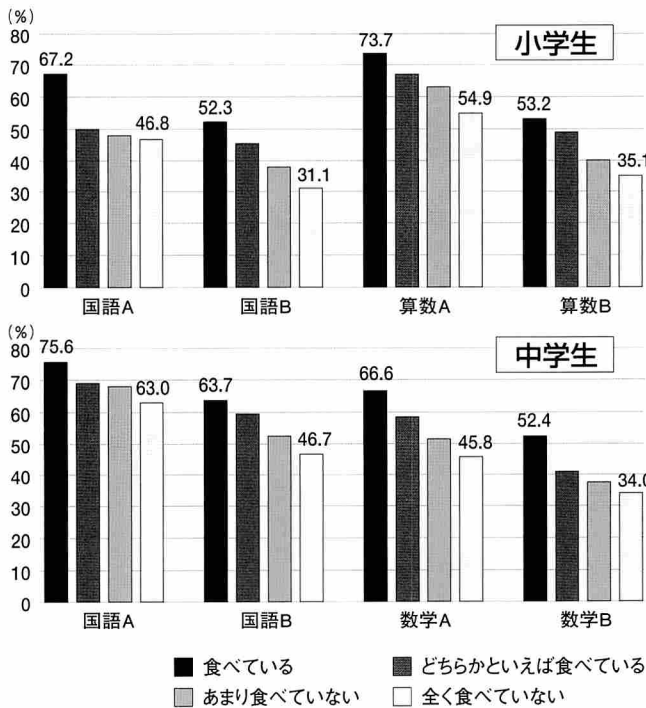
## 朝食を食べないと学力が低下

また、保護者には食育に関して

も理解していただきたいと思

一例ですが、朝食を食べてい

## 朝食の摂取と学力調査の平均正答率との関係



文部科学省「全国学力・学習状況調査」(2008)

出ています。頭を使うためのエネルギーはブドウ糖です。主食の米やパンといった炭水化物がブドウ糖になるわけですから、それを抜いてしまうと頭が働きません。ただし、コーラなどブドウ糖が沢山入っている清涼飲料水がいいかと言うと、そういうわけではありません。ご飯の場合は徐々に消化されて、ブドウ糖も徐々に吸収されますから、血糖値も徐々に高くなっていきます。この「徐々に高くなっていく」ことが大切で、それが頭の中でエネルギーとして使われるわけです。

しかし、清涼飲料水のブドウ糖は体内で出来る物ではなく、すぐに吸収されます。ですから血糖値が急上昇してしまう。それは頭にとって決して良くないのです。しかも、清涼飲料水にはカフェインや砂糖もかなりの量が入っている。子どもの頃からペットボトルを何本も飲むと、インシュリンが急激に分泌されます。小児糖尿病、あるいは糖尿病予備軍になってしまうわけです。

やはり、食べ物をゆつくりと食べて、ゆつくりと吸収して、徐々に頭にエネルギーを送る。これがよく頭を働かせることにつながります。清涼飲料水を短時間に大量に飲む生活をしていると、キレイやすくなるとも言われます。大きなペットボトルを手元に置いてゲームに夢中になっている子どももありますが、危険なことですよ。

## 人間らしい生活で 命の価値を感じる

それから、よく「生命の神秘」と言われますが、人間らしい生活を

していれば、命の価値を感じる事ができるものです。たとえそのような自覚がなくても、大切なものであるという感覚は身に付くのではないのでしょうか。子どもたちがいつも一緒に遊び、自然と付き合っていて、五感を刺激していれば「命があつて、うれしい」「毎日が楽しい」と思えるのではないのでしょうか。

私は以前、NHKの『驚異の小宇宙・人体』という番組の制作に関わりました。生命の誕生から、免疫システム、脳と心などのテーマがあり、私は筋肉と骨について担当しました。改めて人間ということ

のを見ると、子どもは天才だと思います。持っているものをそのまま伸ばしていければいいのです。しかし今は逆にブレーキをかけているような気がしてなりません。

ジャンクフードを食べながら、毎日のようにパソコンやゲームに向かっている姿からは、命の大切さとか神秘という思いは出てこないでしょう。やはり五感、皮膚の感覚で、冷たい熱い、自然に触れ、落ち葉のにおいを感じ、風の心地よさを感じる。歩いて、感じて、それが総合して、自分の気というか命が生きていることを実感できるのではないのでしょうか。

ですから、「本来の人間」に戻りましょうということですよ。文部科学省から「早寝早起き朝ごはん」が提唱されていますが、一日二十四時間、太陽が昇って沈んでという、そのサイクルに合わせて生活するということが大切です。

人を思いやる心も、子どもの時に何でもやらせて、何でも感じ取ってこそ、人と人のコミュニケーションが自然とできて、思いやりが身に付いていくのではないのでしょうか。

# 日本人は偉大だ

いちばん心に響く！ 世界に誇る20人の生き方

杉原千畝  
望月カズ  
新渡戸稲造  
西岡京治

朝河貫一  
野口英世  
鈴木大拙  
ラグーザ玉

織田樞次  
今西錦司  
新島襄  
ほか

学校でも  
ちやんと  
教えて  
ほしい！  
日本の心



増子岳寿 著 四六判 / 246頁 1680円

誇りと自信が湧いてくる！

ご注文は書店へ、お急ぎの方は下記へ

コスモトゥーワン  
tel.03-3988-3911 fax.03-3988-7062  
http://www.cos21.com  
〒171-0021 豊島区西池袋2-39-6-8F

「出生動向調査」

# 結婚意欲はあるが、交際相手なし 未婚者の意識は結婚・家族を重視する傾向に

未婚者の九割弱が結婚への意欲を持つ一方、交際相手がいない未婚者は男性六割、女性五割に上ることが国立社会保障・人口問題研究所の出生動向調査で明らかになった。同調査は五年ごとに実施。今回の第十四回調査では、未婚男性の八六・三％、未婚女性の八九・四％が「いずれ結婚するつもり」と回答。結婚意欲は高い。結婚希望年齢については男性三〇・四歳（前回三〇・〇歳）、女性二八・四歳（同二八・一歳）と前回より高く、晩婚化傾向にある。

一方、年々独身志向は強まり、未婚女性の六・八％、未婚男性の九・四％が「一生結婚するつもりはない」と回答した。第九回調査（一九八七年）と比べると、男性は二倍以上に増えた。結婚に利点を感じる割合も、女性七割強に対して男性は六割弱に止まっている。結婚の利点より、独身生活に利点があると考える未婚者が多いのが気にかかる。とくに男性では結婚

に利点を感じる割合が低く、結婚の大きな阻害要因として経済的理由が挙げられている。

仕事や生活状況の変化が影響してか、異性の交際相手をもたない未婚者は男性六一・四％（前回五二・二％）、女性四九・五％（同四四・七％）と、男女とも大幅に増加した。また、これまで上昇傾向にあった独身者の性経験割合は一九九〇年代に入りやや鈍化。同棲経験の割合では、今回すべての年齢層で減少に転じた。

この二十年を概観すると、結婚・家族に関する意識には微妙な変化がみられる。一九九〇年代には離婚や同棲、生涯独身に対して容認する傾向が高まったが、二〇〇〇年代に入り「離婚は避けるべき」「同棲より結婚すべき」「結婚には犠牲が当然」といった考え方を支持する傾向が強まっている。男女のあり方では八割強が「男らしさ女らしさが必要」と答えており、結婚や家族の伝統を重視する保守化の兆候が見られる。

## 未婚者の結婚意思



国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査」

法務省「犯罪白書」

# 少年の再犯防止「家族」「就職」がポイントに

法務省の「二〇一二年犯罪白書」によると、昨年一年間に検挙され

た刑法犯に占める再犯者の割合(再犯者率)は四二・七%、少年の再

犯(再非行少年率)は三二・五%で、いずれも過去最悪を記録した。

また、白書では少年院出院者のその後の状況を初めて調査した(〇四年一〜三月に十八、十九歳で出院した六百六十四人が対象)。

それによると、二十五歳までに何らかの刑事処分を受けた者は約四割に上っている。このうち三七・五%は、二回以上の刑事処分を受けていた。

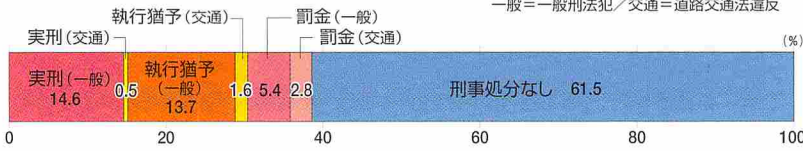
しかも刑事処分を受けた二百四十八人のうち、保護観察終了後、一年以内に犯行に及ぶケースが半数以上、二年半以内では八割に上っている。年齢では二十歳前半から二十一歳前半にかけての年代で初回の犯行のおそれが高かった。

こうした事態に対して、白書が再犯防止のポイントとしてあげているのが「家族」と「就職」だ。少年院在院中(長期)に親族が二回以上面会した者の再犯率は四四・一%だったのに対して、面会が一回か一回もなかった者は五五・五%。刑事処分が実刑だったケースに限ると、二回以上の面会では一八・三%だったのに対して、一回以下では四〇・七%に上っている。

## 少年院出院者の再犯の状況

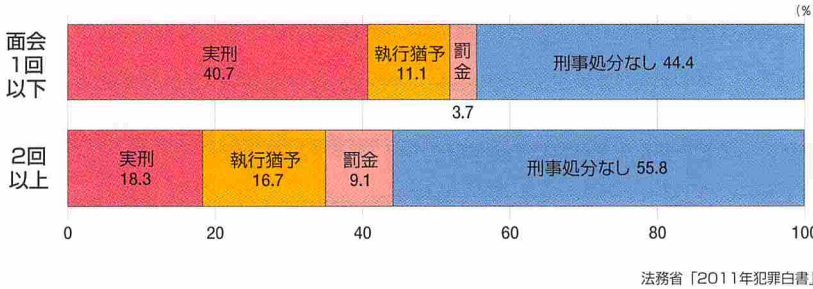
出院時18、19歳で、25歳までに刑事処分を受けた者の割合

一般＝一般刑法犯／交通＝道路交通法違反



## 少年院での親族との面会回数と再犯の状況

長期処遇の場合



法務省「2011年犯罪白書」

犯者率、再非

行少年率は共に上昇。少年の強盗、恐喝では再犯者率が六割を超えている。

また、白書では少年院出院者のその後の状況を初めて調査した(〇四年一〜三月に十八、十九歳で出院した六百六十四人が対象)。

## 「龍のように大きく 強く育って」

十一月、ヒマラヤの小さな王国ブータンからジグメ・ケサル・ワブチュク国王とジェツン・ペマ王妃が国賓として初来日した。日本にとっては東日本大震災後初めての国賓であり、両国の国交二十五周年記念行事の一環として行われたものだった。

このご訪問は両国の皇室間の親交を深め、政府間の関係をいっそう良好なものにしたばかりか、訪れた先々での言動が国民に深い感銘を与え、震災からの復興に取り組むわれわれを勇気づけたのだった。

明治神宮では国民の幸福を祈り、皇室のことを祈り、さらには万物の苦しみからの解放を祈られた。京都の三十三間堂など仏教寺院では、最高の礼を尽くして五体投地の礼拝をなされ、ブータンが精神の大国であったことをわれわれに思い起こさせた。

### ワールド・アフェアーズ

# ブータン — 仏教と 国民総幸福の国

国王夫妻の初来日で注目を集めるブータン。被災地の小学校訪問をはじめ、その言葉と行動は日本の国民に深い感銘を与えた。そしてブータンが提唱する「国民総幸福」の理念は、私たちに幸せの意味を問いかけている。 ジャーナリスト・増子耕一

ブータンの人々は東日本大震災の出来事を聞いて、寺院で供養の燈明を捧げてきたが、来日した国王夫妻は被災地のひとつ、福島県相馬市の小学校を訪れて、地元の人々と深い絆を結んだ。

ここでは、ブータンの国旗に描かれた「龍」の話をされたのだ。「龍

が存在すると思っている人は手を挙げてください。私は見たことがあります」と語りかけ、「私たちが一人ひとりの中に人格という龍が住んでいて、経験を食べて大きく、強くなっていくのです」と話された。

悲しい出来事も、それを血肉として大きく育っていき、と勇気づけ

たのである。

## 農業振興に尽力 した日本人

国王が日本訪問を心待ちにしていたのは、ブータン各地を巡行されたおりに、至るところで、日本の青年海外協力隊が農業に従事したり、あるいは草の根ボランティアグループが奉仕活動をしている現場を見てきたからだ。

その代表的な人物が、一九六四年から九二年に現地で亡くなるまで、ブータンの農業振興に尽力した西岡京治氏だった。西岡氏は海外技術協力事業団（現・国際協力機構）によるコロポ計画の農業技術者として派遣され、夫人の里子さんとともに、農業の発展に尽力した。

その指導で、日本から導入したキュウリ、キャベツ、ネギ、ダイコン、ハクサイなどの野菜が各地で栽培されるようになり、焼畑農民も水田のある村に定着するようになっていった。それは資本主義

的な方法ではなく、農村そのものを村人自身の手で豊かにしていくという、伝統に即したやり方だった。

それは確実な成果をもたらし、国民の生活基盤を向上させることに寄与していったのである。そして西岡氏は一九八〇年、ワンチュク前国王から国の功労者に贈られる最高の爵位「ダシヨ」を授かる。今日までこの爵位を授かった外国人はいないという。

## 仏教に基づいた 「国民総幸福」理念

ブータン国王夫妻の来日は、私たちに、改めて、幸福とは何なのかということを考えさせる。「国民総幸福（GNH）」という理念を提唱している国だからである。近年ブータンが国際的に注目されるようになったのは、この理念によるものだ。

これは先の第四代国王が提唱した理念で、人間は物質的な富だけでは幸せにもなれず、喜びも得ら



11月18日、福島県の小学校を訪問し、児童らと記念写真に納まるブータンのジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王とジェツン・ペマ王妃（福島県相馬市の桜丘小学校）＝時事

れない。経済発展や近代化は生活の質と伝統的価値を犠牲にするものであってはならない、という信念による。

ブータン政府が二〇〇五年の人口調査の際、国民に「あなたは今、幸せですか」という質問をしたと

ころ、「非常に幸せ」と回答したのは四五％、「幸せ」と回答したのは五二％、合わせて九七％に及んだ。

英国のレイチェスター大学が二

〇〇六年に「国民総幸福」という観点から「世界幸福地図」を発表した。人生の充足度を計った社会・

経済・心理学調査だったが、ブータンは八位でアジアのトップ。日本は九十位だったそうだ。  
ブータンを旅してみると、その文化の形態は、日本の仏教が国家仏教だった奈良時代を連想させる。政治が宗教の助言のもとに行われているからだ。中央政府や県庁の庁舎は僧院の中にあり、そこでは僧侶たちが集団で修道生活を送っている。

彼らの精神生活を描いて、ブータンという国を世に知らしめたのが、ベルナルド・ベルトルッチ監督の英仏合作映画「リトル・ブツダ」（一九九三年）。それは世界が注目した仏陀の世界だ。

国民の大半は農業に従事し、農作業も年中行事も、仏教によって秩序づけられた太陰太陽暦に従って行われている。山にも川にも精霊が宿っているという彼らの信仰は、世界でも模範的な自然環境の保護政策という形で表れている。国民総幸福はこのような仏教にもとづいた理念なのだ。■

# 英国の世界的文豪が著した「教育者 吉田松陰」

松下村塾の教育で強烈な印象を残した吉田松陰。その伝記を、英国の文豪ステイーブンソンが書き残していることは、日本では意外に知られていない。

## 『ヨシダ・トラジロウ』

わずか二十九歳と三か月に満たない若さで刑死した吉田松陰の著述は、『吉田松陰全集』（普及版十二冊）となって残されている。それを読んで、遺稿や手紙の類によつて彼の生涯をたどつてゆくと、何とも言いようのない息苦しさに襲われてくる。いったい何故だろうか。

吉田松陰は文政十三年（一八三〇年）八月、長州藩士の家に生まれ、共学師範の家を継いで育つた。いわば彼は、その身分なりに封建

制度の中核となることを期待されて育てられた。それにつれて教育もはなはだしかったが、俊秀であるだけにわずか十一歳にして御前講義を行うなど、その期待にこたえることができ、封建制度に対する絶对的な忠誠を立脚点にするにいたつてゐる。

吉田松陰は、このように誠実な忠誠心から出発した。それだけに彼は、自分の所信が現実の秩序と相容れないことを知つても妥協しようとはせず、あえてそれを打破しようとした。「僕は則ち非礼非法の人のみ」という彼の言葉は（一八五三年）、そうした生き方をしよ

うとする彼の苦悩と決意の強さとをあらわしている。ところで、日本においては意外に知られていないが、『宝島』とか『ジキル博士とハイド氏』などの作品がある、イギリスの世界的文豪 R・ステイーブンソンに『ヨシダ・トラジロウ』（明治十三年）がある。

明治十一年当時、東京開成学校（現・東京大学）教授補佐であった正木退蔵が、外国人教師を採用する依頼を受けエディンバラを訪れた。ある教授の晩餐会に招待され、その席上、恩師吉田松陰が豊富な知識をもとに実行と失敗を繰り返しながら、ひたすら前向きに生き

たことを、往時を振り返りながら語つた。たった数か月ではあつたが、彼の脳裏には松下村塾で教つた教育が強烈に焼き付いていた。たまたま同席していたステイーブンソンは彼の話に感銘を受け、「生きる勇気を与えてくれた人物」として『ヨシダ・トラジロウ』と題する吉田松陰の伝記を書き上げた。明治十三年三月のことだった。



## 河端春雄

かわばた・はるお  
哲学者

1926年北海道生まれ。哲学専攻。文学博士。『実存哲学』『ニーチェの光と影』『技術の思想』『大学の使命』など著訳書、論文多数。他に看護教育について『看護教育方法学』などがある。



ちなみに、日本で吉田松陰の伝記が出版されたのは明治二十四年の野口勝一・富岡政信編『吉田松陰伝』だが、それは単なる史料集に過ぎなかった。

## 「人類の最も高潔な人物」

R・ステイブソン著『ヨシダ・トラジロウ』から、その一部を訳出してみたが、至誠を信じた教育者吉田松陰の人となりが彷彿とさせられるのではないか。

十三歳の少年（マサキ）の目を通して、この英雄の性格と習慣を見ることが出来る。彼は醜く、滑稽なほど天然痘の痕が残っていた。天は二物を与えなかった。彼の性格は「だらしが無い」といえるものだった。衣服はみすぼらしかった。食事や洗面の時には、袖で手を拭いた。髪は二か月に一度しか結わなかったから、見苦しかった。このような姿を見れば、彼が結婚しなかったことは想像できよう。良き師であり、話す時は情熱に



吉田松陰（国会図書館蔵）

まなかつた。字を美しく書くことが代書人の特徴ではなく、紳士の特技として賞賛される国で、事態の切迫さや流れ出る信念によって文字が揺れ動いても、彼は気にしなかつた。

（中略）

満ちていたが、立ち居ふる舞いは穏やかだった。彼の授業は難しいため、生徒たちの頭を通り越して、彼らはぼかんと口を開けたままだった。学問に対する彼の情熱は誰にも負けないくらい激しかったので、休むことを惜しんだほどだ。彼は勉強中に眠くなると、夏であれば着物の袂に蚊を留まらせ、冬には裸足で雪の上を駆け回り、眠気を覚まさせていた。また、彼は非常に悪筆であった。彼は詩人であるにもかかわらず、優美なものを好

以上が、塾生たちが感じた、彼の雰囲気である。しかしこれは、塾生<sup>かき</sup>の素質から語られたものではない。一般的に、これほど身だしなみに無頓着な男は、少年や女性にとつて一顧の価値もないのである。実際に、多少なりとも学校に行ったことがある者であれば、ヨシダが塾生たちから笑いのものにされたことに驚く者はいないだろう。生徒というものは、鋭いユーモアの感覚を持つている。生徒は、書物の中で英雄を理解し、尊敬する

ことを学ぶ。しかし、同世代の人の中では、議論好きで、不潔で、風変わりな人は、英雄にはなれない。しかし、年月が経ったヨシダの塾生たちが、彼以上の指導者を見つけようとしても無駄だと分かり、彼の「教育の意味」を深く理解するようになると、塾生は、この滑稽な師を「人類の最も高潔な人物」として見つめ直すようになった。

## 「心に火をつける教師」

ゆくりなくも、イギリスの教育学者ウイリアム・アーサー・ワードの箴言を思い出す。「良い教師はかみ砕いて教える。優れた教師は考えさせる。偉大な教師は心に火をつける。」と。（傍点筆者）吉田松陰は、このような生き方をした人間だった。自分の足場の崩壊をまともに見つめなければならぬ苦しさ、しかもたじろぐまいとする決意の強さが、彼の著述を読むものに息苦しさを与える圧迫感となって忍び込んでくるのではなからうか。■

## ピエール=オーギュスト・ルノワール (1841 ~ 1919) リハビリ捨て「永遠に残る美」を描き続ける

色彩の魔術師は、病  
で手足の自由を奪わ  
れても、リハビリを  
捨て「永遠に残る美」  
を描き続けた。

ジャーナリスト 池永達夫

### 事故の後遺症で 手足の自由失う

色彩の魔術師といわれたルノワールの作品は、優しく穏やかで、今もなお多くの人々に愛されている。とりわけルノワールが描く豊富な裸婦像と愛らしい少女像は有名だ。ただ晩年のルノワールは、度重なる不幸に次々と襲われることになる。それは油絵のようではなく、水彩画のようであった。油絵は色を重ねても、前の色に支配されることは少ないが、水彩画は色を重ねるごとに、暗く沈んだ色になっていく。

ルノワールは働き盛りの五十六歳の時、乗っていた自転車で横転し右腕を骨折した。それ以後、リユ

マチの発作を後遺症として持つようになつた。

このリユーマチはルノワールの体を生涯、苦しめることになる。ルノワールは七十八歳で死ぬまでの二十年余、手の自由を奪われながらも創作活動を継続していった。事故から二年後の一八九九年、とうとう右腕が全く動かなくなり、木の棒を胴体にくくりつけたような状態になつた。

ルノワールは温泉治療に出向き、治療に専念したものの結局、完全には回復しなかつた。さらに六十一歳になると、ルノワールの手足は硬直し始めた。階段を上ったり下りたりすることができなくなつたので、引越しを余儀なくされることになる。

そして七十歳の時、とうとうルノワールはリユーマチで歩けなくなつた。ルノワールが七十歳の時から七十八歳で死ぬまでに立てたのは、七十一歳の時の一日だけであつた。それでもルノワールは車椅子に座つたまま、キャンパスの前で筆を使い続けた。親指と人差

し指の間に筆を縛り付けるといふ壮絶な姿で絵を描き続けた。

朝から晩までアトリエのキャンバスに座つて描き続けたピカソの勤勉さは有名だが、ルノワールほど全身全霊で創作活動に従事した芸術家も少ない。何せ立てなくなつたルノワールは、何とか頑張れば歩くためのリハビリを続けることで歩行を回復させる道もあつたが、絵の製作に全精力を注ぎ込むため、歩くことを捨てた経緯がある。

### 「痛みはいつか消え 美は永遠に残る」

ルノワールとすれば、健康第一の人生ではなく、絵を描いてこそその人生だと達観していた。ルノワールは健康を犠牲にしても、絵を描き続けることが喜びだった。この時もルノワールは、女の子や女性やばらの花などを好んで描き続けた。

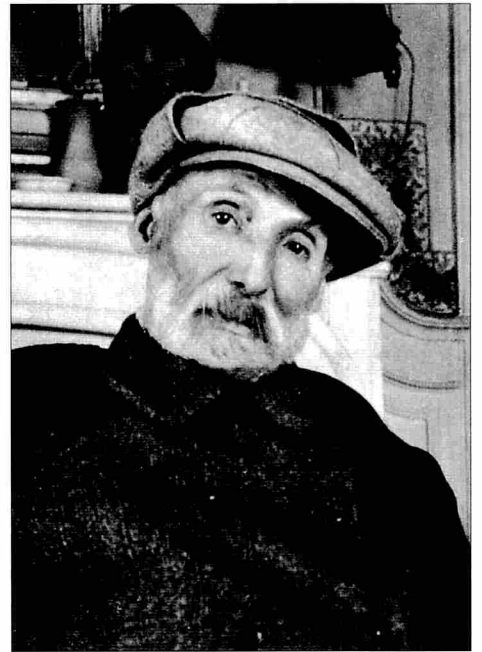
「痛みはいつか消えるが、美は永遠に残る」

このルノワールの言葉に示唆さ

# 病を克服した偉人たち



れるように、ルノワールは不自由な体を押し出して、キャンバスの中に筆が作り出す「美の宇宙」を封印し、永遠の命を吹き込もうとした。有限の命を燃やしきっても、永遠の美の世界を構築できるなら、肉体の苦痛は「美の神殿」に供える犠牲の燔祭でしかなかった。パレットに盛る絵の具に明るいものが多かったのも、生涯変わらなかった。ルノワールの絵は、老衰やリユーマチからくる苦渋の影は全くなかった。ルノワールは人生を常に積極的に肯定し、色彩豊かな花や輝く果物、陽光に満ちた、



ピエール=オーギュスト・ルノワール (ROGER\_VIOULET)

はじけるような景色に愛らしい女の子、そして何より命あふれる豊かな裸婦像を描いた。

印象派の画家は、いずれも明るい光を求め、それを多彩な色彩感覚のプリズムを通してキャンバスの中に置いていく作業を行うが、ルノワールの絵の特徴は、いずれも生命のぬくもりを伴っているのが特徴だ。

## 時代の先駆者として受けた石つぶての洗礼

しかし、今こそ印象派は賛美

を持つて迎えられるが、作品の発表当時は惨憺たるものだった。モネやシスレー同様、新風を吹き込ませた印象派の新しい画風は、当時の批評家から嘲笑され、理解を得ることはなかった。

一八七五年作の「陽光を浴びる裸婦」もフィガロ紙に「腐りかかった肉の塊で、死体の完全な腐乱状態を示している」とまで酷評された。時代の先駆者というのは、歓呼の声で迎えられる前に、大体、石つぶての洗礼を受けるものだ。

そうした幸運の女神から見放された忍耐と試練の時に、ルノワールを救ったのはかけがえない友人たちだった。ルノワールは「僕は元来、頑張り屋のたちではなかった。頑張り屋のモノに励まされなかったら、絵筆を捨てていたかもしれない」と語っている。

こう述懐したルノワールは一九一九年十二月二日、終の棲家となったコレット荘で息を引き取った。死の数時間前に花を描きたいから筆とパレットを持ってきてくれと頼んだという。E

# 子育ては＊絵本で＊大丈夫

\* 17



浜島代志子  
劇団天童/  
天童芸術学校代表

## 戦の中にも笛の音 芸術は人の心を溶かします

「ひよどりごえ 源平絵巻物語」



「ひよどりごえ 源平絵巻物語」  
赤羽末吉／絵 今西祐行／文

文といい絵といい天下一品。こどもから大人まで読める絵本。神戸に須磨寺というお寺があり、青葉の笛が保管されています。

♪ 一ノ谷の軍（いくさ）敗れ討たれし平家の公達 あはれ  
暁寒し 須磨の風に 聞こえしはこれか 青葉の笛 ♪

敦盛（あつもり・平清盛の甥）塚の前にキーボードのようなものが置いてあって、歌詞のとおりに押せば青葉の笛のメロディが流れます。私と母が朗々と歌っていると、若い観光客が寄ってきて、「なんですの、その歌」と聞きます。「ま

乗った熊谷次郎直実（なおざね）、平敦盛の像の前で写真を撮りました。平成二十三年二月四日に天に召された母との思い出です。

◇ ◇ ◇

ひよどりごえの坂落としというおはなしをご存じですか。源義経が険しいひよどり越えを馬にまたがり真っ先切って坂を駆け下りた話です。神戸須磨育ちの私は、家でも学校でも坂落としの歌を聞いていました。

♪ 馬も四つ足鹿も四つ足 鹿の越え行くこの坂道 馬の越せない道理はないと 大将義経 真っ

あ、あんたら知らんの、敦盛の青葉の笛やがな」と母。詩吟で鍛えた母の喉、娘の私は芝居で鍛えた喉、二人が歌えば観光客も寄ってきます。ガイドさんも聞き惚れていました。二年前に母と連れだつて須磨寺に行つたときのことです。馬に

先に ♪

須磨、一ノ谷で激しい源平の戦がありました。明日の戦を前にして浜辺に陣を取った平家の公達平敦盛は静かに青葉の笛にくちびるを当て妙なる音を響かせました。偵察にきていた板東武者の熊谷次郎直実が妙なる笛の音を耳にしました。

さて、次の日、源平の激しい戦が繰り広げられ、沖へ逃れようとする敦盛の首をとろうとした直実、見れば我が息子と同じ歳頃の少年ではないか。助けようとしたが源氏の軍勢がわらわらときたので致し方なく首を取ったものの、ぼろりと落ちたのが青葉の笛でした。敦盛の祖父の忠盛が鳥羽上皇から賜った笛でした。

◇ ◇ ◇

歌から入れば歴史がすうっと心に入ります。だから、私はミュージカルで表現します。先日は「山椒太夫」公演。家族の愛と絆、許しの心をリクツじゃなく伝える為舞台上に立ちました。■

## 人格教育に基づいた性教育――

# 「愛と結婚の教育」を実践する

人格教育の実践の一つとして、「人格教育に基づいた性教育」を紹介する。

### 学校で教えるポイント

米国では人格教育に基づいた性教育が広く受け入れられている。強調点の一つは「Abstinence（自己抑制）」、つまり「結婚するまで性行為を控える」という考え方だ。

人格教育の第一人者トーマス・リコーナ・ニューヨーク州立大学教授は、人格を基礎とする性教育の目標は「性について正しい決定を下すことができるよう生徒を指導すること」だと述べている。

リコーナ教授が著書の中でまず勧めるのは、人間として親しくなれる方法。その人の考え方や感情、将来や夢などを知り、相手にも自分を知ってもらうために、他者の内面を引き出す質問をしたり、会

話のスキルを学ぶようにする。

次に将来像を示す。性について単に「大人になるまで待つ」というだけではなく、大人になるとはどういうことか、性はどのような役割を果たすのかということを教える。

例えば上級の学年であれば次のような話をして、「性は大切に扱うべきもの」であることに気づかせる。「性交渉は特別のものであり、夫婦関係のためのものです。それは、継続的に愛し合うふたりの人間によるものである時に、最も有意義で充実したものとなります。：性交渉を持つこととは、身体と共に『私自身の全てをあなたに捧げます』と宣言するようなものです。：身体を差し出すということは、人生を差し出すということに他なり

ません。この絶対的な親密性は絶対的な関係にこそふさわしいものです。：夫婦こそが性交渉を持つのに最もふさわしい関係です。なぜなら夫婦関係こそ、人類社会がこれまで編み出してきた最も真実で、全体的で、公的な人間関係だからです」

また、人格教育に基づく性教育を学校で行う際、次の五点を教える。

①未婚の人にとって、性行為を控えることが医学的に唯一の安全策であり、精神的な健康を守り、道徳的な責任を満たす判断である。

②コンドームを用いて性行為を持つても、身体的に安全になるわけではなく、妊娠や性感染症の可能性があります。精神的にも傷つき、愛することの倫理的な意味も損なう。相手の健康や幸福を危険にさらす限り、相手に愛を求めることはできない。

③結婚前の性行為を避けることは、結婚のための最も大事な準備である。それは自分にとって最善であるだけでなく、将来の配偶者や子供、地域社会や国家のためにも最善の選択である。

④結婚前の性行為を避けることは、自制心、他者の尊重、責任、勇気などの人格を培う良い手段。

⑤過去に性行為を持っていた場合でも、やり直すことができる。

### 「家族を守る」教育

リコーナ教授は、「性教育」を「愛と結婚の教育」という言葉に置き換えることが良いと提案している。性の問題が結婚や将来像につながるからだ。そう考えると、性教育は「家族を維持する」あるいは「家族を守る」教育という観点から行うことが大切だと言えるだろう。■

〈資料〉「人格教育のすべて」(トーマス・リコーナ著、麗澤大学出版会) 小誌二〇〇三年六月号「学校で美德をどう教えるか―人格教育の実践③」、二〇〇五年四月号「人格教育に基づく性教育をどう進めるか」

幸福の研究

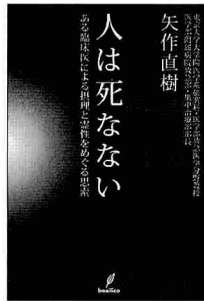
デレック・ボック著／東洋経  
済新報社／二七三〇円(税込)



う知見が数多く示されている。離婚による家庭崩壊や健康の悪化による社会コストの増大が、いかに国家財政を圧迫しているか。幸福な社会実現のために、どんな政策が有効なのか。日本の家族や社会保障政策を考える上でも、示唆に富んだ政策提言書。

人は死なない

矢作直樹著／バジリコ株式  
会社／一三六五円(税込)



著者は医師として救命医療の現場で生死をさ迷う患者を数多く見てきた。自身の体験と過去の心霊科学の研究成果を重ね合わせながら、科学の眼で霊魂や生死の謎、神の存在について思索し考察している。

本書は子供の頃、交通事故で生死をさ迷った時の記憶の記述で始

「魂の教育」とは何か

人格教育では、子供たちが教師や父母など模範となる人の人格に触れて良い影響を受けることが大切です。また、「人格」の語源には「魂に刻まれたもの」という意味があります。「魂の教育」は人格の核心とも言える魂の無限の可能性に気づき、その魂を強めていくこと、あるいは子供たちが自己の内面の価値に目覚めて人格の形成をなすことだと考えます。例えば、「大自然に大いなるものの存在を感じる」と言いますが、そうした無限の価値、意識のようなものを自分自身の中に見出すことだと言うこともできるでしょう。

まる。「なぜ人間には良心があるのか」という素朴な疑問が、やがて心霊科学への興味を深めていく。自身の冬山登山の滑落事故や著名な登山家らが滑落中に経験した体外離脱や不思議な霊体験、患者から聞いた多くの体外離脱体験の事例をありのままに紹介している。

後半は、実際に起こった超常現象の事実、スウェーデンボルグはじめ心霊研究の成果、キューブラー・ロスやレイモンド・ムーディーらが行った死後の研究を重ね合わせ、霊魂の存在を解き明かしていく。誰も漠然と心のなかに抱いているある世界について、素直に共感できるのは書き手の誠実さか。何よりも真正面から取り上げるのがないテーマに現役の東大医学部教授が真摯に向き合っている、死後の世界と神の存在を明確に表明したこと。二つの点で本書の意味は大きい。

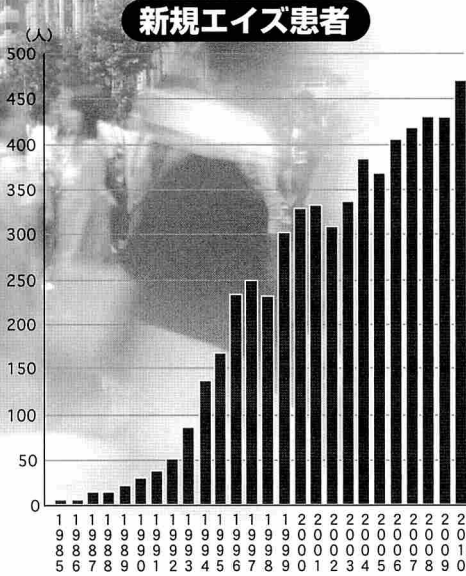
■表紙写真 雪化粧の中を歩む

撮影・大塚克己

# 性の乱れを正しエイズを撲滅しよう

十二月一日は「世界エイズデー」です。米国ではじめて症例が報告されてから三十年。これまで全世界で三千万人の命を奪ったことで、エイズの恐ろしさは十分知れ渡ったはずですが、それでも毎年新たに二百六十万人がHIV感染者として報告されています。

新たな感染者の多くは発展途上国の人々です。欧米の先進国では感染防止への啓発活動が進み、横ばいもしくは減少傾向となっているのです。しかし、先進国の中で唯一増加傾向が続いているのが日本です。二〇一〇年一年間の新たな患者は四百六十九人で過去最高。感染者は



(厚生労働省エイズ動向委員会「エイズ発生動向報告」から)

千七十五人で過去二番目の多さです。この結果、感染者・患者は二万人(一〇年六月末現在)に迫る勢いです。かつては「死に至る病」と言われて、取り上げるマスコミも多かったエイズですが、最近は報道されることが少なくなっています。現在のように、人々の関心が薄い状況が続けば、わが国での爆発的な感染は時間の問題でしょう。

う。なんとかそれを防がなくてはなりません。現在行われているような避妊具の使用を促すことに重点を置いたエイズ予防や知識中心の性教育を見直す必要があります。感染が拡大し続ける現実は、これまで

のエイズへの対処方法が明らかに失敗であったことを示しているのですから。エイズやそのほかの性感染症の増加や低年齢化の原因は何でしょうか。それは性の乱れです。したがって、HIV感染の拡大に歯止めをかけ、エイズとの戦いに打ち勝つ方法は、性の乱れを正すこと以外にありません。そのためには、家庭や学校で「純潔」の尊さを教え、若者たちが自分の性を大切にする風潮を強める運動が求められます。私たち、真の家庭運動推進協議会は社会の性の乱れを正す先頭に立ちたいと考えています。

毎月第3日曜日は「家庭の日」  
11月第3日曜日は「家族の日」

「家庭の日」は、社団法人「青少年育成国民市民会」が進めてきた「家庭の日」運動に端を発し、今ではほとんどの自治体で、第3日曜日を「家庭の日」に定めています。さらに政府は十月の第3日曜日を「家族の日」、その前後一週間は「家族の週間」として定め、また「この日を機会に、家族の強い絆を確立せよ、それは家族のみんなの幸福な未来のために」と呼びかけています。

## 家庭は愛の学校

真の家庭運動推進協議会

The Association for the Promotion of True Families  
〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2 成約ビル4F  
電話03(6457)7760 FAX03(6457)7761 http://www.aptf.gr.jp

●皆様の御意見や気づいたことをお寄せ下さい。教育問題に関して、皆様の身の回りでの様々な出来事や御意見などを真の家庭運動推進協議会本部までお寄せ下さい。お寄せいただいたものを参考にしながら、皆様と共によりよい教育環境や家庭づくりに取り組んでいきたいと考えています。



第3種郵便物認可  
2012年1月10日発行  
毎月10日発行・通巻260号

# 洋学校で多くの逸材育てた米国人教師／熊本

歴史と  
伝統の  
探訪



(左上より時計回りに) ジェーンズ、「奉教趣意書」記念碑(花岡山山頂)、ジェーンズ邸(熊本市内)、日本赤十字発祥記念の部屋(邸内2階)

熊本市水前寺公園奥に移築・保存され、熊本県重要文化財に指定される「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」の主人こそ、アメリカ人L・L・ジェーンズ(一八三七〜一九〇九)である。彼はリンカーン率いる北軍で戦った退役将校であった。

明治四年、三十四歳で家族と来日したジェーンズは、教育者のみならず熊本の殖産興業(農業・酪畜・印刷)にも大きく貢献をする。熊本藩が開いた洋学校には、十倍以上の難関を経て五年間に十歳から十五歳の二百名が入学。学費全免の全寮制エリート校の教育は実にユニークで、英、数、理、社、演説など二十教科以上をジェーンズ一人が、しかも全て英語で教えた。

それを可能にした四つの特徴は、①徹底した自学自習(授業は午前午後一時間ずつのみ)、②班別学習(優秀者が後進を教える)、③演説

教育、④近代学校日本初の男女共学、であった。また、毎日成績で席順を入れ替え、成績不振者には突然退学が宣告されたため「毎日が試験」のように皆が真剣に勉強した。後の、徳富蘇峰、海老名弾正、横井時雄、横井時敬、中原淳蔵ら多くの逸材を輩出した。

ジェーンズの高潔な人格に薫陶を受け来日三年目頃から始まった聖書研究会の参加者に、熱心なキリスト教信者が生まれた。彼ら三十五名は明治九年一月三十日、熊本駅そばの花岡山に登り「奉教趣意書」の誓いを立てる。この一連の行動が問題視され、洋学校の同年七月の閉校が決定。閉校後、優秀な生徒達は京都の同志社英学校に転校し「熊本バンド」と呼ばれるようになる。ちなみに同志社英学校第一期の卒業生十五名は、全員ジェーンズの教え子達であった。■

2012

1

no.260

En-ichi

●発行所  
NCU-NEWS  
(東西南北統一運動国民連合)

〒160-0022  
東京都新宿区新宿5-13-2  
成約ビル2F  
TEL.03(5362)0631  
FAX.03(3354)5017  
E-mail news@en-ichi.org  
URL http://www.en-ichi.org

●発行人 渡辺久義  
京都大学名誉教授

定価 400円  
[1年間5000円(送料込み)]  
郵便振替番号  
00160-3-667291

●本誌に対するご意見、ご感想をお寄せください。  
●定期購読のお申し込みは、電話またはEメールでどうぞ。